
スライド

シェン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スライド

【Zコード】

Z4034D

【作者名】

シン

【あらすじ】

ある日、怪しい小包が送られ、そして帶刀したメイド少女があらわれたり。折角入った名門校を入学前に退学したりと。さらに、裏世界の実体を垣間見ることに。……なる予定。

一四三 その一・主語はちやんとつけよ

自宅玄関 A M 1 1 : 1 2

春休み4日目のことだった。

僕宛に郵便物が一つ届いた。それは宛先不明な小包。かなり怪しいそれを僕は何の警戒もなく開けてしまった。今更後悔。

中にはブレスレットらしきものと、黒い紙切れと青い紙切れがが入つてあった。

黒い紙を手に取る。

それに書かれていた内容はこうだった。

『おめでとうござります。

貴方様は見事101人の中の1人に見事選ばれました。拒否権はございません。

しかし、勝ち残ればそれに見合ひ地位と財産が手に入るでしょう。尚、同封されているブレスレットを3月30日午前11時までに装着しない場合は、執行人が貴方を始末します。

ブレスレットの詳しい使い方については、青い紙の方をご覧下さい』

……

まつ、次いこ。

今度は青い紙を見ることにした。

取扱説明書

- ・右手にまめる（左手でも可）

『

だけかよ！――――！

少ないし、詳しくないし、意味ないし。これいらねえし。

……まあいいや。

さて、と。まだこれに書いてある期限まで4日あるな。

わからなこものは、トモ田つ慎重にと書つてたからな。

誰が言つてたんだろう?

……まいに。や。

寝よ。

有言実行と言つたので、僕は自室に戻つて寝ることにした。

自室 AM11:19

さてさて、これはどうこうことなんだらう。

僕の部屋に見知らぬ少女がメイド服を着て、正座をして、さうじこちらを睨んでいるではないか。とりあえず、

「失礼しました」

ぎいー、バタン。

一度ドアを閉めて深呼吸。

すーはー。すーはー。

よし、確認。

ここは僕んちあれば他人。ここでえらこのは僕。あのメイドじゃない。

「よし……」

「気合いを入れていざ出陣！」

再びドアを開けるとさつきと同じ位置で鋭い眼光で睨んでいる。

しかし、この状況を打破しなければ、

「……なんで、僕の部屋にいるんでしょうが」

つい敬語になってしまった。

気合い負けした証拠だな。うん。

「見たか」

「えつ？」

急な問いかけで反応できなかつた。

「見たかと聞いている。早く答える」 あくまで、正座を崩さず、それでいて命令口調。……といつより、なんで命令されてんの僕？ 最初の敬語がいけなかつた？

「貴様早く答えぬと斬るぞ」
わあー、帯刀している。

絶対銃刀法違反とかなんとか言つたら斬られるだろつなー。

「貴い様あー、ここまでシカトされたのは初めてだ。後10秒『え』るそのうちに答えなければ斬る。嘘じやないからな。絶対だぞ」
いや、逆に嘘っぽいでしょ。『じゅーひ』

『きゅー』

突つ込みどころ満載なんだよね、この状況。

『はーひ』

『なな、るーく』

なな普通だしー！

『よーじー

『よーん

といつあえず、

『そーん

正直に言つたまつが

『ひーい

いいだろ!。

『いーち

『ぜーーー

「あのー」

「なんだ

「すいません、見ました」

「別に謝る必要はない。で、どうだ」

「えーっと、あおとしろのしましまもーーー」と思ひながら、僕的には、
清楚な感じの純白がいいと思こます

「?」

あれ?違つたかな。あの子の顔がだんだん赤くなつていいく。うん、
斬られるな僕。

「……つ。死ねえー」「やつぱり。

ぐせつ。

僕の後ろのドアに彼女が投げた刀が刺さつた。ふー、間一髪。
冗談はさておき、このまんまじや埒があかないな。
では、

「結局、なにを？」

「……なにがだ？」

「主語がわかんないよ。それじゃ

「つむ、確かに。すまなかつた。だがな、さつきの件は許さぬから
な」 ちよつと涙目で睨みつける少女に少しどキッとした。

一田三 その2：刃物と可愛い子には逆らえない

自室 P M 1 2 ∙ 3 1

いやー、やつと理解できた。けど納得は出来ない。まあ、今までの話をまとめるところなる。

あの紙はある高校への推薦状。そして、あのプレスレットは校章。つまり……今入るうとしている高校をやめてそつちの高校に行け。そして、試験に合格出来れば入学できるとのこと。

しかも断れば殺すし、不合格の場合も殺すらしい。理不尽極まりないとはまさにこのことだ。

そして田の前のこの少女はその高校の一年生。

そして、僕を抹殺してくれる執行人らしい。

「ところでさ」

「なんだ」

「昼飯にしない？」

「うむ、確かに今は昼時だな。よし、何か作れ」 命令形にも、もう慣れたし。

「はい、はい。で、なんでもいい?」

「余程、不味いものではない限りよい」

「じゃあ、待つてすぐ作るから」

さてと、じゃあ作るかな。

彼女の名前は、既斬 夏葉（きざり なつは）。僕と同い年。

これは、僕が命を賭けて掴んだ情報だつた。

『高校つて飛び級?』その迂闊な発言がトリガーになってしまったらしい。おかげで刀の柄で散々なぐられてしまった。まだ、腰が痛い。

よし、
できた。後は持つて行くだけか。

白室

「なんだ、コレは？」
「カツチラーメンだけど？」
「そんなのはな、見ればわかる。」
「不味くはないよ」
「まさか、ジャンクフードがでるとはな」
「好き嫌いすると大きくならないよ」
「こんなモノ食べても大きくならぬ」
「じゃあ、食べない？」
「いや、食べる」
「じゃ、わざと食べる。伸びやかに」

結局のところ、おいしそうに食べていた。猫舌ひじく、執拗なま
でに息を吹きかけている様子が可愛いかった。言わないけど。
さて、と。お腹がいっぱいになつたことだし、そろそろ続
といこうかな。

「さつきの話。結局ああ断ることは出来ないんだよね」

「出来るが、死ぬことになる」

それを世間じや出来ないともいつ。

「どうしても？」

「どうしてもだ」

「君はどうして、その高校に入ったの」

「今のお貴様とだいたい同じだ」

「じゃあ、僕の気持ちわかるよね」

「わからんな。貴様と私じや違いますさる」

「性別とか？」

ボカツ。

殴られた。今度は峰で。

その内斬られるんじゃないだろうか、僕？

「まあよい。しかしながら、私のことなど話ても別に貴様の状況が変わ
るわけではない」

「その通りだけども、なんか参考にならないかなと思つて」

「ならんな。…………それで、他にないか？ないならないでまだ4日
ある。じっくり考えるがよい」

拒否られました。まあいいさ、人には言えないことなんて一つや二
つはあるからね。

「じゃあ聞くけど、試験つてなにをするの？面接とか？」

「毎回違うらしいが、私たちの場合はな、ある人の護衛だった」

「護衛？」

「言つてなかつたか。この学校は普通の学校と違つ。才能あるものだけが、その才能を引き出すためだけに政府直轄で創られたもらしい。そしてその後はいろいろな大企業の護衛やら暗殺、さらには裏の世界の仕事に携わつて行くことになるらし。」

初耳だよ。

「じゃあ部活動は？」

「あるにはあるんだが、ほとんどが武術だ。そして大会などにはまず出れん」

「野球部は？」

「ないな」

「じゃあ行かない」

「では、死ね」

刃先が喉元でストップする。

「人生最後の言葉だ言つてみろ」と言つた人変わりすぎ。

「ごめんなさい」

死んだらサッカーボールじゃなくなる。ここは我慢、我慢。

「ふー。全く優柔不断なやつめ」

既斬さんはヤレヤレと言いながら、切つ先ををおろした。そして言葉を繋げる。

「でも、それが賢い。野球など将来プロ野球とやらに入れば良いではないか」

「そう簡単になれるもんじゃないですけど、仮になるつて言つたらやらせてくれるんですか？その学校」

「まず無理だな」

「じゃあ駄目じゃないですか」

「諦めるのが早い。まだ貴様には力が無いが、これに選ばれた以上何か才能があるのだろう？では力がついてから脱獄なり脱走なりすればいいではないか」

なんかこの人かっこいい。……けど、

「そんなこと言つていいんですか」「よい。やるのは貴様だからな」

「前言撤回。」この人は真っ直ぐすぎるだけなんだ。

「ちなみに今まで脱走した人は？」

「ここには押さえておくべきところでしょ。」

「いたが、ほとんど死んだらしい」

「じゃあ、可能性はあるんですね」

「まあ、そうなるな」

ゼロじゃない。と言つことは、まだチャンスはあるところだ。

「ここで殺されるよりは、はるかにましだね。」

「ふつ、貴様は弱氣なのか強気なのか全くわからんな」

「褒められたと解釈していいですか？」

「よい」

なんか褒められたらしい。

まあ要するに強くなるしか方法がないわけか。

「既斬さん」

「夏葉でよい」

「夏葉さん」

「なんだ」

「その試験受けることにします」

「わかった。ではここにサインを」

夏葉さんはなんかいっぱい細かい字で書いている紙を取り出す。

その一部分だけ空白の部分があつた。

「ここ？」

「そうだ」

「ボールペンでいい？」

「よい」

では、『詩宝院銀』つと。

「これでいい？」

「よい。貴様はこれで試験中一切殺されても文句一つ言えぬ訳だ」

「え？」

「「」」を見ろ」

そう言つて人差し指を出してくる。

「いい指してますね」

ドカッ。

ぐーで殴られた。

「バカ者、その先だ」

爪ですか？とか言つたら殴られることは明白なのでなんとかこらえることにした。

指の先の紙には細かい字でなんか書いてある。

「えーっと。このしけんを、うけるに、おいて、しんで、もこつさい、もんくを、いいません」

「だそうだ」

「死ぬんですか？」

「さあ？どうだらうな」

「前回はどうだつたんですか？」

「死んだ奴もいたな。まあ大丈夫であろう」

この人の言動は、根拠は無いくせに妙な説得力がある。

「まあ、どうせ死ぬならあがいてから死にますよ。死ぬ氣は毛頭無いですけどね。」

「その意気だ」

「ところで試験内容は？」

「明日までに来るよつに手配する」

今までの平穀だった日常が、たつた今日といつゝだけで崩壊した。

まったく人生は何が起こるかわからない。だからおもしろいんだけど。

まあ、今は試験が筆記にならうと祈る」といふ。)

自宅 PM3:15

今日、アイツ等の元を離れて懐かしのこの街に帰ってきた。3年振りくらいか。

飛行機で1時間。そこからタクシーで50分弱。

まあ念願の一人暮らしが叶うってワケだ。それに、やつとアイツ等から離れることができた。

部屋は3LDK。高校生が一人暮らしするには広すぎるがまあいいか。

家賃? それはアイツ等が出すつていつていた。

アイツ等も俺を追い出したがっていたし、俺はあそこが嫌いだった。これがアイツ等の力でなったことでも、別に不満はない。

さて部屋もだいぶ片づいた。とはいっても荷物なんて何も持つてきてい。あるのは手元のカードと現金一百万ちょい。現地調達つてやつだ。

「暇だー」

もちろんこの部屋には自分一人しか居ないので、これは一人言になる。癖というやつだ。

テレビをつけてみる。やはりここ数年治安が悪いのがわかる。

犯罪行為なんて日常茶飯事。

殺人には至つては2日に1回以上のペースで行われる場合もある。

そしてこの街も例外ではなく、ある犯罪が起きていた。

通称、首斬り魔。

ちょうど3年前からこの街に現れて未だに捕まつていらない奴だ。字に書いて読んだ通り首を斬るやつだ。

こいつのせいで、かつての俺はこの街から出なきやいけなくなつた。全くひどい話だ。

まあ、今では別にこの手の事件は世界中で見ればそう珍しくない。殺人が行われない街の方が珍しいくらいだ。

しかし未だに、この手のニュースは結構放送されている。つーか今は昼だぞこの野郎。

チャンネルを変えてみる。

昼ドラ、占い、ニュース、ニュース、昼ドラ、ニュース、再放送バラエティー、ニュース、ニュース、ニュース、釣り番組で、さつきのニュースに戻った。

結果圧倒的大差でニュースの優勝。

……ってなんだそりや。

まあ仕方ない釣りでも見るか。

「へえ、釣りするんですか？」

「しねえよ。ただ他の番組がつまんねえからこれ見てんだよ」

「では、占いを見ましょ。意外におもしろいですよ」

「俺はあーいうのは……って待て」

「はい、なんですか？」

「誰だ貴様は」

「申し遅れました。柴雲高校の聖 じゅうん 聖 ひじり 優奈 ゆうな と申します。」

そう言つてぺこりと頭を下げた。

「今時は高校生も強盗するような世界になつてしまつたのか。だが、生憎俺は今日引っ越して來たばかりでな、盗めるようなものは何もないぜ」

「いや、あたしは強盗なんかじやありませんよ」

違うか、じゃあなんだいつたい。身長170くらいはある。そし

てセーラー服にトンファーといつ異色の組み合わせが、……ってトンファー！？

「わかつた、テメエは人殺しが目的だな」

「違います。人の話を聞いてください」

「じゃあそのトンファーはなんだよ」

「これですか」

と言いながら、彼女は軽くそれを回す。

「そうだよ」

平静を保ちつつ、返答をする。あくまで襲われても大丈夫なように間合いもしつかりとつてある。これでも一応、武術の心得くらいはある。空手をやっていたからな。

2週間だつたが。

「試験用です」

「なんの」

「あなたの適性検査ですよ」

そう言って彼女は、3mくらいあつた間合いを一瞬で詰めて、俺の眼前30cmにトンファーをつきたてた。

一四三 その4・最初の学校でのあだ名は金色の狼

自宅 PM3:23

彼女はすぐにトンファーをおろした。

「どうです、見えましたか？」

「いいや、見えなかつたよ」

あれは目で追えるスピードじゃなかつた。でも場数は踏んでいる。だからわかつた。

「殺氣はなかつた、だろ？」

「ええ。充分、合格点です」

「コレが試験か？」

「いいえ、違います」

そんなにあまくないか。

「なんだかわからんが、俺は試験とかいつのには興味はない」

嘘だけど。けど面倒くさい。

「拒否権はないですよ」

「いや、あるだろ普通」

「すでにこの状況が普通とでも？」

「たしかに、普通じゃねえな。

「もし、それでも断るなら？」

「その時は、あなたの友人が死ぬことになります」

「俺に友人なんていねえよ」

「これは、本当だ。

小中ともに、170を超える長身だったのと金色の髪が災いして、あっちから近づこうとする奴は殆どいなかつた。いたとすれば、不良どもだけか。あいつ等のせいでさらに俺の評判は悪くなつた。ただ突つかかって来る奴がしつこいから顔面ぶん殴つてやつただけなんだが、次の日にはすでに学校中に知れ渡つていて、教師どもに散

々言われたな。それを小5から立て続けにだ。おかげでかなり転校するはめになつた。

「ゲームセンター」

「はつ？」

「覚えていりますか？4年前のゲーム。ヴァーチャル・サバイバルを覚えている。5年前突如、無名のゲーム会社が作つて話題になつたやつだ。3人1組で行うサバイバルゲーム。対象年齢12歳。誕生日になつてからソッコーで行つた記憶がある。

「あれか。でも、あれつてたしか……」

「そうです。廃棄になりました」

殺人事件を起こした犯人がたまたまこのゲームの事を言つたせいとかなんとかだつたような気がする。

「で、それがなんだ」

「あなた方は、レコード記録叩き出しましたね」

「……出したな」

「その時の2人が死にます」

「何で、ギンとあいつを殺すことになる？」

訂正。

さつき思い出したが、2人だけいた。

まあ、友人つて言つていいかわからんが、たつた1人だけ俺に不良じやないやつでついて来る奴がいた。そいつがギンだ。別にいつから一緒にいたかわからないがいつの間にか俺の隣にいた。で、女つていうのは、ただ人数合わせに、ゲーセンでぼーっとしてゐるのを捕まえた1日限りの友人だ。まあ、ほとんどそいつのおかげで勝つたようなもんだが。

「私が殺すわけではなく、試験で死ぬことになる確率が上がるということです」

卑怯な、あいつ等は俺の数少ない友人だ。……忘れてたけど。

「……で、試験つて何だよ」

「受けるなら教えます」

「受けたやる」

「じゃあこれにサインを」

「そう書いて、やたら細かい字が書いている紙を俺に手渡した。

「ここ」の空欄でいいのか

「はい」

大神 龍吾 (おおがみ りょう) 記入完了。

「終わった。さつさと教えやがれ」

「せつかちですね、まあいいですか?」

「いいから」

「では、試験内容はこの街にいる首斬り魔の討滅です」

「そうか」

「驚かないんですね」

「逆に納得した。確かに俺がいなきやあいつ等死ぬな

「あなたがいれば死ないとでも?」

彼女は微笑する。

「さあな。だけどな、あいつと会つて生きてんのは俺だけだろ。多

分

母親を犠牲にして。生き残った、俺。その後の糞のよつた人生。全ての元凶である首斬り魔。

「憎いですか?」

「何が」

「首斬り魔です」

どうやら俺の素性は筒抜けのよつだ。

「……別に」

今は興味ない。

「そうですか」

「では、試験は4月8日までです」

「それまでに出来なかつたら」

「今は倒すことだけ考えて下さー」

「それも、そうだな」

「では、これを」

「なんだ、これは？」

手渡されたのは青いブレスレット。

「ブレスレットですよ」

「見ればわかる」

「御守りです」

彼女は言い終えてからすぐこの家から立ち去った。

台風のような奴だったな。

さて、取りあえず聞くのを忘れたが、どうやって2人に連絡取りやいいんだ。

……まあ、どうにかなるだろ。

廃墟

AM2:32

息を整える。

やつと逃げることができた。作戦はばっちり。
これでやつと自由になれた。あんな所はまっぴらぐりめん。頼まれ
たつて帰つてやるもんか。

「イタツ」

足の裏から血が出ている。でも当然といえば当然か。だつて裸足
でここまで来たんだから。

今思うとかなり異様な光景だつたんだろうと思う。街中をボロボ
ロの衣服を纏い、裸足で駆け抜ける少女。自分で言うのも何だけど。
まあ、夜というのが幸いしたけど。だけど、少なからず人はいた。

「……となると、」

「こにいるのがばれるのも時間の問題だらう。

けど、しばらくは脚が動かない、4キロずつと走りっぱなしだ
ったから。そして、この怪我じやいけたとしても、まず遠くまでい
けないだらう。

「どうしょうかな」

八方塞がりだ。

あたしは戦闘向きじゃない。

どちらかといつて、頭脳労働のほうだ。

だから考える。

思考する。志向する。試行する。

ガタツ

階段のほうから音がした。小さい音だけど、この場所じゃよく響く。どうしよう、あそこに戻されたら絶対殺されてしまつ。最悪の場合はここだ。

しかし見つかるには早すぎる。あそこでの起床は6時半だった。やつらの確率は20%もないけど、だからといって油断はできない。まあどのみち逃げることなんて出来やしないんだけど。

確率を信じますか。

「どちらさまですか」

「あはははは」

「笑わないで下をこ。このまま疲れてるんです」

「ごめんごめん。おかげ、いつもくるとは思つてなくて」

「疲れてるんです」

内心ほつとしている。やつらじやなにから。やつらのところは戦闘要員は全員女だ。まあ仮にやつらの仲間だとしても、戦闘要員以外のやつこは負ける気はしない。無論この怪我じゃ勝てないと思つけど。だけど…………。

「疲れてるとこひの悪いけど、話しひき合つてくれない?」

「ナンパですか」

「違います」

そう言いながら、そこは近づいて来た。もう3メートルもない。

身長170くらいの細身の男。顔立ちからして高校生だと思う。あたしからはそいつが見える。そいつからもあたしのことが見えるわけだ。そいつがいくら田が悪くても、月光があたしを照らしている。

裸足に服がボロボロ。柱にもたれかからなきや立つてられないあたしを。さぞかし滑稽なことだろう。

そんなあたしに彼は喋りかける。

「僕の名前は一歩。警戒しなくてよいよ。別に危害を加える気は全くない。むしろ、逆の方だよ」

「逆？」

「そう。君の所属してたの。えーとなんて言つたかな？」

「九条学園だよ」

嘘を言つてもしようがないし、もうあたしはあそこの人間じゃない。「そうそれ。表向きはお嬢様学校だけど、裏では殺し屋やら暗殺者を育成する場所」

「人体実験もやっています。……あなた裏の人ですか？」

「うーん、裏といえば裏だね。でも、僕達は政府直轄の完全監視下のもとだけど。それに比べて君たちは大企業のお偉いさんたちだから格が違つけどね」

「その政府の人があたしごときに何のようです？」

「いいや、僕は政府の人じやない。あくまでも監視下に置かれてる身。まあ寮長だから規制は緩いけどね。だから出てきた。で、用というのは、君を勧誘しにきた。君という人材を消すのは惜しいからなるからね」

「あたしには利用価値なんて無いです」

「利用するのは君の方だよ。僕達を利用してあそこから逃げる。あつちには迂闊に手は出せないけど。あつち側も同じだ。全面戦争になるからね」

「戦闘集団ですよ、あつちは。」

「いっちは超能力者だよ」

「…………？」

「信じてないな。とは言つても、僕も最初は信じれなかつたよ。まあ、なれば解るよ」

「なる気はありません」

「でもなる。それは決定事項。この力は人を選ぶ。そして君は選ばれた」

「誰ですか？」

「さあ？ 神さまじゃないかな」

「悪魔の悪戯。それはあたしが生まれたこと。」

「天使の悪戯。それはあたしに生きる希望を与えててしまったこと。」

「神の悪戯。それはあたしに生きるチャンスを与えてしまったこと。」

「そしてあたしは初めて神に感謝した。」

一田三 やのせ・もひひん無農薬です

廃墟 AM3:00

あいつはあたしに応急処置をすると、今日は遅いからやつぱり帰ると言つて帰つていつた。

去り際に、

「君はまだ見つからない、それは僕が保証する。だから今は体力を回復させるんだ、きたるべき戦いに備えてね」と、意味あり気にそう言つていた。戦いつて何なのよと囁つ暇もなくあいつは去つていつた。

「ふうああ～……眠つ

あいつが去つて急に睡魔が襲つてきた。今は何時かわからないがとりあえず眠ることにした。
考えるのは明日にしょづ。

廃墟 PM5:30

田を覚ますと、当たりはオレンジ色に染まつていた。

「今は夕方かな……」

意味も無い咳き。

ふと足の傷をみるとやはりもう治つていた。

これは、奴らの人体実験の成果、…………と言つわけではなく、最初からあたしの体質だつた。昔は学園側にバレたら間違いないく実験台にされると思つて怖かつたが、今となつては、有り難い。

ぐ～～。

どこからともなく聞抜けなお腹の音が聞こえた。

ここにあたし1人しかいないことを考へると、あたしのお腹なわけだが。生憎、今あたしはお金がない。あつたとしても、さすがに街に行けば奴らに見つかるだろ。どうしようかと考えると、またあの足音が聞こえた。

「はい～」

その後に聞抜けな声とともにあいつが現れた。

「そろそろ起きる頃だと思ってね。そうそうこれ食べる？」

そう言つてあいつは、右手に持つている黒い袋をあたしに見せる形であげた。

勿論、食べたいけど、

「条件は？」

絶対あるに決まってる。案の定あいつは

「あはははは、君はやつぱり鋭いな」

とか言つて笑つている。

全然気にしてる様子がないのが逆に腹立たしいけど。

「別にそんな悪い条件じゃないさ。ただ僕の話を聞くだけでいい」

「聞くだけ？」

「なんなら食べながら聞いてくれ」

と言つて、袋をあたしに放り投げた。中をみると、トマト×8……

……軽いいじめか。まあ嫌いじゃないし、ニヤニヤしてこいつを見ているあいつのシナリオ通りにさせる気もない。

1つのトマトを手にとつて、それをガブリとかじりながらあいつを睨んだ。

そななあたしを見てあいつはニヤニヤしながら、

「君ならやうすると思つていていたよ」と言つた。

勿論、嘘だろ？と思つ。つか嘘だよな。 何も言わないあたしを見

てあいつは勝手に話しをし始めた。

話が終わる頃には既に月が出ており、トマトも全部無くなつてい

た。

結論から言つと、常識を大きく逸脱して常人ならふざけるなど一蹴する内容だったが、一応あたしは裏で生きていたし、あんな事が成り立つなら、今のファンタジーのよつたな話しを信じてもいいかなくらいには思えた。

この時既にこの廃墟が、奴らに囲まれてゐるのに気づかないほど、あたしの精神はボロボロだった。

なぜか俺はアラームの5分前に起きるといつ習慣がある。それはもはや習慣と言いつてもいいくらい。今日も例外ではなく、目覚めた。一度でいいからアラーム無しで寝てみようと考えたが、一度と起きられ無くなるのは止めたのでやつた」とはない。俺は小心者なのだ。

ようやく、頭が回り始めて、昨日の出来事を思い出す。よくよく考えると、面倒なことに巻き込まれてしまつたと気が。まあ言つてしまつた以上しようがないか。

とりあえず飯だ、飯。

台所 AM8:03

トン、トン、トン、トン、トン。

リズミカルな音が聞こえてきた。無論俺じやない。自慢じやないが、俺は料理なんかできないし、そもそも引っ越しして来たばかりなの

に材料なんて用意してない。あるいはカッpmenだけ。

考えられる事は、聖つて女ぐらいか。まあとりえず入ればわかるだろ。ガラツと台所のドアを開けるとそこには、見知らぬ男が包丁を持っていた。

「おはようございます。そろそろ旦が覚める頃合いだと思っていましたよ。すぐに朝食準備するので、リビングで待つていて下さい」
いや、まず誰だよ。とは言わなかつた。恐らく昨日の聖とか言つ奴と何らかの関係があると思つたからだ。だから

「飯、食つたらさつと要件いいやがれ」

「話が早くてたすかりますよ。では、リビングでお待ちください。すぐにはみますから」

「ひいらを一切振り向かず、そいつは言つた。

リビング AM8:05

そう言えば、全然片づけてなかつたな。この惨状は、昨日から全く変わつておらず、むしろ更に散らかつた感がある。まあ気のせいだろ。からうじて、備え付けのソファーの上には何も乗つてなかつたので、そこに座つて待つことにした。

テレビをつけた。何か占いがやつていた。昨日聖と見たのと同じ局だつた。ここ放送局は、占いメインなのか?と、俺は普通考えれば誰でもわかるようなことを真剣に考える癖があるらしい。唯一、少ない友人から聞いた話だ。

俺がそんなくだらない事を思い出しても、台所にいたそいつがリビングに来た。

「いや、またせましたね。もちろん、待たせる気は毛頭無かつたですよ。しかし、どうやら私は刃物が不得手なようだ」

そう言つて、俺の前のテーブルには皿にのつたぶつ切りのトマトが

置かれた。それどころじゃなかつた。

いかにも食欲をそそらない、むしろ減退させるよつた。結論から言つと、切らないで食つた方がマシと思わせるよつた。酷い有り様だった。

「……お前トマトに個人的怨みがあるのか？」

「何ですか？」

「……？」

「……？」

「……一言いいか」

「なんでしょう？」

「農家の皆さんに謝りやがれ！」

「……御忠告ありがとうございます。どうやら、今回の事で私は刃物は合わないといつを痛感しました。私は既斬の姫君とは違いますからね」

最後のは、よくわからなかつたが今の俺には関係の無ことだう。

一〇三 その一・勿論全部食つたけど（後書き）

毎回書くの遅いし、少ないし、眠いし。……最後は関係ないけど
(笑)

一四三 その2・実は最初から演技でした

リビング AM8:12

「ところで、そろそろ話してくれよ」

あのトマトをなんとか処理した後、俺は話しきり出す事にした。とは言つても、見た目はどうあれ普通のトマトだからあまり時間はかからなかつたが。

「まあ、慌てないで下さい。まだ役者は揃つません。私自身としては同じ話しきり何度もするという無駄な行為はしたくないのですが、あなたがどうしても私にさせたいなら構いませんが？」

「…わかつたよ。俺も無駄な事はしたくないからな。ところでよ、役者つて誰だ」

「あなたがよく知つてゐる人ですよ」

「答えに」

俺が言つたとほほ同じタイミングで、チャイムがなつた。あいつは変わらない作り笑いで、俺に行くよう促した。

まあここは1日も経つてはいなが、ちゃんとした俺の家だ。家主が行くのは、当然だろ？

俺は、そいつに背を向け玄関に向かつた。

玄関 AM8:14

鍵がかかっていた……のは、まあいい俺が昨日かけた。あいつ、どうやつて……まあ考へても無駄だな。そう思い直して、俺は鍵を外した。

「せんぱーい、既斬ちゃんがずっとおこりやこりやしてゐるよ~

「…………おい、抱きつるのは構わないし胸があたっているのも良しとしよう。だがな、俺はお前の先輩じゃねえし、キャラ変わりすきだらが、お前」

俺の胸元にあの聖とつトンファー女が抱きついてきた。

「…………」

「…………」

「…………」

「…………」

おい、赤くなるなよ。俺まで、恥ずかしくなるだろ。そして、俯いたまま黙つて震えるな、泣いているのか？

視線を更に落として見ると手にはトンファーが握られてあつた。

「…………不可抗力つてか、お前が先だろ。だからその物騒な物をしまえ」

聖は俺の顔を見て笑顔になつた。

「どうやら、分かつてくれたようだ。

「お互い今のことは無かつたこ」

「龍吾くん？」

俺の言葉を遮るように、聖が喋つた、のはいい。だが、このどす黒いまでの負のオーラはなんだ？どうやら、これを出してる張本人は目の前にいる聖のようだ。

「あの、聖さん？」

つい、さん付けになつたのはこのオーラのせいだ、と思いたい。

「つ、の、なにするかーっ！」

そう言つて、右手のトンファーを俺の顎に向かつて突き上げた。それは俺の目には見えない速さで、さで、俺の顎なんて簡単に碎くほどのパワーをもつっていた。

それを今の俺には避けれはすもなかつた。

ガキンと金属がぶつかる音がした。俺にわかるのは、トンファーに何かがあたつて止まつたということだけだった。

それは、日常生活において滅多に見ることのない、ストレートに

言うと刀だ。それが俺の顎とトンファーの間、ちょうど匕首の所で止まっていた。とは、いつても顎と刀の間は1cmもない。

「優奈、先の件はお前の勘違いだろ? こやつは何も悪くはない。して言えば、先の物言いとその人相だな」

声の方を向こうとして、

「動かぬ方が、良い。頭と胴が離れるぞ」

その場で急停止。刀を見ると、匕首ややりトンファーを刀の腹で止めたらしい。

だが、何故刃をこちら向きにする必要がある? こっちの考えを知つてか知らずか、俺の疑問に答えてくれた。

「流石に、優奈の一撃を悠々と受けるには無理がある、すまなかつた」

なかなか礼儀正しい人だつた。いきなり、人にトンファー向ける奴とは大違ひだ。

「こちらこそ怪我をせずにするんだ、ありがとう」

「怪我? 馬鹿を言え、あれは首から上がなくなるぞ」

「マジで」

「マジだ」

そう言って刀を鞘に戻そうとした瞬間。

「すきありつー」

「ごふつ」

鳩尾をやられた。

「すまん、油断した」

とは言つたものも顔が笑つてゐる、さてはグルだつたな。恐らく、俺が刀に気を取られてた数秒に合図とかあつたんだろ。前言撤回。やっぱり、聖同等の嫌な奴だ。しかし、俺が何故やられる必要がある?

「元はと言えばあなたがいけないので。あんな男といつしょに」

「…」

「寝てたことか?」

「つ…………それです！不潔です。」「来る途中だつていちゃいちや、いちゃいちゃと」

「別に昨夜は、他に床が無かつただけだ。そして何も起こりなかつた。道中だつて普通に会話してただけだ」

「うつ、でも」

「俺をおいて言つて話してんじゃねえー。しかも関係ねえし。よ

くわからんねえけど理不尽だー」

「狼。我慢が足りないよ、僕なんてここに来てから今まで一言も喋つてないよ」

懐かしい声がした、懐かしい香りがした。そこには懐かしい奴がいた。

「『龍』と呼ばれてた俺を唯一『狼』と表現した男。

「おかえり」

「…………あ」

そこには、何も変わらないままでの紫宝院銀がいた。

一 田中 その2・実は最初から演技でした（後書き）

性格が変わってる？仕様だよ（笑）

1 | 四三 やのま・長こ長いポーテールに惹かれて(前書き)

かっこくつねるとお正月です

一四三 その3・長い長いポーテールに惹かれて

リビング AM 8:20

銀とともに味気ない感動の再会?を果たした後にあいつから話があつた。

そして大分端折つて分かつことだけまとめる事にした。
あのトマト野郎の名前が一歩であること。別にどうでもいいが……
……。

俺と銀とあいつが不思議な力に選ばれたこと。

使うには同封されたプレスレットをつけること。因みに、俺はその時までそれの存在に全くもつて気づいてなかつたりして。

昨夜あいつが大ピンチだということ。

で、俺達が現在進行形で助けに行く準備をしている事。

「ちょっと、話を聴いてるのですか

「ああ、聞いてるよ」

「ならよろしい、続けますね。今、説明した通りスライドには

」

スライドというのは不思議な力の事だ。今それについて、教えるもらつてる最中だ。ハつの属性に分けられて発動には一定の条件が必要な事。条件が難しい程、スライドが協力になる。逆もまた然りつて訳で、最も条件も何も自然的に勝手に決まるもので、蓋を開けなきやわからぬ状態だつたりもする。

俺は、炎だつたりする。この時ばかりはつづく、漫画ちつぐだと苦笑したが。

因みに銀は、シールドとかバリアとか身を守る物だつたりする。多分性格が原因なんだと思うと勝手に思つたりなんかした。

「……………」

ということなのです。わかりましたか?

「ああわかつたよ」

勿論、なんにもわかつちゃない。まあ意地でもなんとかしてやるさ。んにもわかつちゃない。まあ意地でもなんとかしてやるわ。惚れた弱みつて奴さ。

なんてね。

いつの間にか空には、月が輝いてた。

気づいた時には、既に囮まれていた。

「脱走は重罪。万死にあたいるわ。なぜ貴女のような方がそのような事をしたんですか？」

「うるさいな」。籠の中の鳥は飽きたんだよ。それに」

それに今日は、約束の日。

「どうやら50人弱はいるみたいですね。君はそんなに九条の重要な部分に関わってたみたいですね」

15人に囮まれているという状況下でも「ヤーヤーしてん」に一つの気が知れない。

あたしの前には彼女しかいない分、少しは動けない事もない。しかし、後ろに待機している30人前後のせいでの逃げるにはまず無理だ。

「まあね。これでも2課の所長を勤めてたからや」

お互いの手の内がわかつてゐる状態で数が多いほうが勝るのは必須。

「へえ、その若さです」といですね」

やつぱあいつらに期待するのは、お門違いだから、ここつが鍵かな？

「あんたも十分若いでしょ」

「うひや、ごちやうるさいです。どうやら、そちらの方も十分こひらの事情を知つてゐる訳ですね。あなたにはここで消えてもうつ」とにします

「別にいいけど、いいの？あたしが死んだら、あそこの情報が全世界に流れるようになつていいのよ」

もちろん「ラフだが、時間を稼ぐことに越したことはない。

「それくらい承知しています。だから貴女は生け捕りにさせていただきますよ。勿論、今言つた事が本当だつた場合にはですね。それに、時間稼ぎは無駄です。駄です。1.5 Km圏内は部下が既に見回つて常時更新中です。異常があれば即座にわかります」

だから、あきらめてください。と彼女はあたしに言った。

確かに九条だつたらやりかねない。まして、内部に精通しているあたしなんだから、それ相応に。

しょーがない覚悟決めますか。

「言つとくけど、少しば抵抗するよ……被検体238番。秋保南さん」

「……流石ですね。九条で一、一を争う頭脳の持ち主だけはありますね。こうやつて私の動搖を煽り、指揮を乱そつとしてるのですね。安心してください。無駄ですから」

そして彼女 秋保は薄く笑つた。これが彼女が最後に見せた笑みだつた。

秋保はダーツを取り出して、片手各3本ずつ持つて構える。

「そつそつ、言い忘れてましたけど、生きてれば良いと言われてるだけで、五体満足で連れてこいとは言わせてませんから。精々死がない程度に避けてくださいね。あなたなら勿論簡単でしょ」

秋保は言い終わると同時にダーツを放つた。

でもそれは私に届かない。

「まあ避けるまでもないけど。あたしは有名だから知つてるでしょ？」

「勿論。通称、**護鞭**。^{マモリノムチ}貴女にはこれもあつたから、2課の所長になれたんですね。遠距離系の攻撃はほぼ無効。近づけば鞭の範囲に入る。九条のシリアルナンバーぐらいではないですか？互角に渡り合えるのは」

「わかつてゐなら無駄な事はやめれ

「護鞭を手放しなさい。彼がどうなつても知りませんよ」

「……！？」

予想外な事を言われて、一瞬声が出なかつた。

「その反応はやはり。調べはついています。こいつが約束の人なんですね」

調べついてねえし。

「なんか勘違いしてゐるし。そいつとは、今初めて会つたばかりだし、他人も同然だわ。煮るなり焼くなり、好きにしなさい」

「酷い言い方ですね。トマトあげたじやないですか」

うるさい、トマトだけで恩着せがましい。

「…………マジ、ですか？」

「マジで」

つか、その情報はあつてるが画像とか準備しろよ。

「うううつ」

「あんたバカでしょ」

「……バカつて言つな」

あつ素がでた。

「で、どうすんの？手負いのあたし相手でもランク外のあんたじや勝ち目ないでしょ。引く？」

「バカにしないでください。私は昔の貴女を尊敬しているから、傷をつけたくなかったのです。別に名前知つててもらつたのが嬉しくて、舞い上がつてなぞいません」

舞い上がつてるんだつて、ここにいるみんな思つてるんだろうな。

「秋保、がんばつ」

「敵のくせに同情するな。しかし、勘違いも甚だしいんです。シリアルナンバーはいますよ。勿論、あなたもご存知の方だと思います。けど、ちょっと遅刻してるので私直々出向いてるんです。本来ならば、前線にいるような人間ではないのですよ」

勘違いしてたお前にだけは言われたくなかつたよ。

「人望もないんだな」

「うるさい。黙りなさい」

ダーツの矢を投げてきたが、威嚇にもならない。鞭で叩く。

それにしても厄介だな。迷子ちゃんはセカンドかシックスのうちのどれかだな。

だけどな、

「作者、文才ないんだから、キャラ増やさない方がいいと思つよ。

唯でさえ、放置気味だったのに

」

「あーっ。あーっ。あーっ。シャラップ黙れ。そっち方面に行くと、

軌道修正が難しいんだから

「冗談よ」

そう言つことにしておこう。だつて秋保泣きそうだし。

「僕はいつまでも囮まれてればいいのかな？」

「あなたは用済みです。本当だつたら人質の役目になる人だつたのに使えないですね」

秋保は、そう言つと今までずっとおとなしくこのやうとりを見守つて待機していた部下達に指示を出した。

部下達はサーベルを構え、あいつに向かつていつた。かく言つあいつは、最後まで不敵に笑みを浮かべて、あつという間に、こいつは串刺しになつた。

「呆気ないですね。まあこの人数を相手に諦めたくなる気持ちはわかりますが」

確かに、呆気なさすぎる。

「おい、大丈夫……なわけないよな」

既に、出血多量で死んでもおかしくないくらいの血は出でる。

「ゲフッ。いくなんでも助けないと言つの

と

声が掠れて聞こえないが大体言いたいことはわかる。あたしへの不平不満だろ？

「おっ、生きてたか。別に、自称超能力者のお前だつたら余裕だと思つただけだよ。まあ、貴様は、惨めに死ぬだけだがな」

しかし表向きそだとしても、あたしにはわかる。これは、あいつの作戦だ。入れ替わりか、もしくは何らかな、幻術か。とりあえづ、あいつが普通の人間とは違うのは確かだ。

「僕は、ここで い場の ですね。直ぐに、援 来ると思つのでして下さい」

と言つて、それつきり動かなくなつた。

「おい、嘘だろ?返事しろ。貴様は、超能力者なんだろ?」この場合、超能力者なら生きているという論理もおかしいがそんなこと関係ない。あいつに近づこうとした瞬間、右足に鋭い痛みが走つた。見るとダーツの矢が刺さつていた。

「ちゃんと避けて下さいと言いましたよ。どのみち彼が何者かにしろ、死んだ者は生き返りませんよ」

それが世の中の撲理というものです。と秋保は言つた。

「ちつ。私もすっかり甘ちゃんになつたようだね。トマトくれただけのやつに情が移るなんて」

お陰様で残していた体力もすっかり無くなつてしまつた。

「もう抵抗するだけ無駄です。これなら、私でもあなたを捕縛できそうですね。わざわざ、シリアルナンバーを呼ぶまでもなかつたです」

「これで、書く手間が省け

「言つなつて言つてるだろ」

「ジヨークだよ」

「全く減らず口が減らない人ですね」

「あたしもそう思つ.....うわあつ!」

突如、あいつの死体が青白く光出した。いち早く気づいたあたしは、とつさに目を閉じた。おそらく、あいつの超能力と言つのは、死んでからもしくは瀕死状態で発生するものなのか。

予想外の出来事に対処できない九条側の焦りや戸惑いの声が聞こえてくる。この状況は秋保じや身が重すぎるな。

「まあ関係ないけどさ、つと」

やつと、光が収まつてきた。だが、視力が完全に回復しきつてい。

しかし、それはあまり関係ないことだった。なぜなら、九条側も

それは同じ。もしくはあたしより悪いぐらいだらう。

そして、音が全く聞こえなくなつて、ただ声だけが聞こえた。

「大丈夫ですか？」

「ただで死ぬとは、思つてなかつたが、それがお前の超能力か？」
ちょっと予想はしていたが、驚いた事実には変わりなく、つい質問とは関係ない思つた事を口に出してしまつた。

「違いますが、今はそういうことにじとじて下さい。早くこいつに。時間が持たない」

あいつが焦つている？この光の持続時間を言つてるのか？まあいい。光の大元に行けばいいんだろ？

あたしは一步を踏みだそうとした。

「つ……無理だ。傷が思つたより深い。悪いが運びに来てくれ」
どうやら、矢には、神経毒があつたようだ。まああたしの捕獲命令である以上さほど強いものではないだらう。どうでさつきから思考が回らないはずだ。

「わかりました。皆さん、プランBです。戦闘準備お願ひします」「戦うのか？」

「なあに、僕自身は戦闘向きじゃありませんが、後はよりすぐりです。……とつ、良いこと思いつきました。3人の入学試験これから無事脱出ということにしましよう。あの犯罪者はまあ次の機会にでも。ということです。これより、時間は、現代の狭間より未来に移行します」

？言つてゐる事はわからないが、要するに戦うつて事だる。残念ながら、あたしは戦闘に参加出来そうもないが、自身を守るくらいの余力はある。

既に、視界は戻つてゐる、光は勢いを失い闇に飲まれ

「あつ」

その後ろには

「じめん、もたついてさ」と、紫宝院の梓が笑い、

「よお、遅くなつたが約束の時間に明記はしてなかつたからな」と、ぶつきりぱつに頬を赤くしてそっぽを向くあたしのおおかみさんの姿があつた。

「2人とも遅いぞ。特にでかい方。あたしをそんなに待たせるな寂しかつた。とは声に出さなかつた。恥ずかしいし。

光が完全に消え、音が蘇り、この舞台の終焉の始まりを告げた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4034d/>

スライド

2010年11月12日02時23分発行